

組織細胞形態学・神経科学領域

10年の足跡（主に20周年以後のあゆみ）

福井医科大学解剖学（2）講座は、大学統合により平成15年10月福井大学医学部形態機能医科学講座組織細胞形態学・神経科学領域となり、今日に到る。

およそ10年前にあたる平成12年1月当時の教室のスタッフは、佐藤真教授、鳥越甲順助教授、永野隆助手、八木秀司助手の教員4名に加え、霊河秀樹技術専門職員、藤森三苗事務官（産休）、加藤とも子技術補佐員であった。解剖学（1）との共通教務助手（解剖実習の準備などを担当）は、鈴木操主任教務助手、鰐淵（現姓、明智）勝隆教務助手の2名が務めていた。また、大学院生として高村佳宏（眼科学）、久保田力（整形外科）が指導を受けていた。

以下、福井医科大学二十周年記念誌に記載した以降の出来事（平成12年1月以降）を中心として述べる。

人事消息：教員の異動について記す。鳥越甲順が平成14年4月に東海大学医学部に教授として赴任した。入れ替わりに永野隆が助手より講師に昇格、さらに同年10月には助教授に昇格した。永野隆は、平成16年4月より休職し、英国ケンブリッジ Babraham 研究所に留学、平成19年3月退職後も引き続きケンブリッジに留まり独立し研究生活を送っている。平成12年6月に研究生として神戸大学より入室した安藤康一は本学小児科医員を経て、平成13年2月より助手として奉職し、平成16年12月元来の専門である小児科医となり転出した。竹内聖二は、平成17年4月に大阪大学より講師として赴任し、平成20年3月まで本学に勤務した。

現在（平成22年10月現在）所属の教員について記載する。八木秀司は、平成20年4月に講師に昇進し、平成21年4月より准教授となった。謝敏かくは、上海第2医科大学卒業後金沢大学にて平成13年学位を取得、以後フランス留学等を経て夫君の勤務地である福井に移り、平成18年8月にCOE 研究員として、さらに平成20年4月より助教として勤務している。黒田一樹はカナダより平成21年5月に生命科学複合研究教育センター（以後、生命センター）特命助教として本教室の一員となり、平成21年10月より助教として勤務している。猪口徳一は平成20年4月、奈

良先端大学院大学より医学部特命助教として着任し、平成21年10月からは生命センター特命助教として引き続き本教室にて研究を行っている。平成22年5月には駒田致和が重点研究高度化推進本部特命助教として京都大学より本領域に加わり、さらに9月より堀之内和広が生命センター機関研究員として奈良先端大学院大学より加わった。なお、同年1月に重点研究高度化推進本部特命助教として宮崎大学より入室した千原悠里は、出産のため同年8月末に依願退職した。

スタッフ等についての異動は紙面の制限で省略するが、<http://www.med.u-fukui.ac.jp/KAIBOU2/> を参照されたい。

① 研究

大脳皮質をはじめとする脳神経系の形成・発達について主に分子・細胞レベルでの研究を進めた。特に細胞移動から見た大脳皮質の形成機構については、FILIP 分子の新たな発見、アクチン結合分子フィラミンの役割などの成果をあげ、さらに共同研究ではあるが滑脳症治療へのアプローチなどについて研究を進めるなど、幾つかの世界的成果が生まれた（Nature Cell Biology 2002, J. Neurosci. 2004, Neurosci. Res. 2008、また共同研究では札幌医大と PNAS 2008、大阪市大と Nature Medicine 2009）。さらに Vlg1 受容体と遺伝的難聴などの関係を解明した（J. Neurochem. 2005, Genes Cells 2007, Neurosci. Lett. 2009、仏パスツール研と J. Neurosci. 2007）。さらに、方向性をもった細胞移動についてその分子機構の一つを解明した（J. Biol. Chem. 2010）。

② 教育

学部教育について記す。平成14年度までは、「解剖学ⅠⅡ」（頭頸部肉眼解剖学、神経解剖学、生殖・泌尿器系を除く組織学）を担当した。平成15年度以降は、カリキュラム変更に伴い「組織・各臓器の構成、機能と位置関係」（組織学）、「人体解剖学2」（神経解剖学）を担当している。その他、「免疫と生体防御」、「医学英語5」の一部等も担当している。担当教員は学生の授業評価でも毎年優秀教員に選出されている。

今後の展望、これからの10年

新教室となり10年余が過ぎた。多くの皆さんの力でその間、教室が着実に歩めたと思う。今後、医療への貢献をより意識し、高い水準の研究・教育に邁進したいと考えている。（文責：佐藤 真）